

山奥オーケストラ奮戦記

(天童市市民プラザ代表・チェリリスト)
(天童市芸術文化振興協会事務局長)

「山形交響楽団」奇跡的設立のプロセス

～同志社から東北へ音楽の灯をともし～



一、無から有を、「山形交響楽団」設立の真意

人生は滔滔と流れる大河のようである。どんな河の流れにも、必ず最初の一滴がある。私達にとって、一滴を流し続け河の流れを形作る「源泉」こそ、最も大切なものだ。

それは、凝縮して充滿した純粹な心であり、考えであり、出会いであり、愛である。私にとって「源泉」となったのは、京都・同志社での七年間の生活で培われた精神である。

チェロと出会い、パブロ・カザルスに啓発され、アーモスト館で生活し、新島スピリットによって根底から揺さぶられた。ここで、私は人間としてどのように生きるべきかを学んだ。

二十五歳の夏、京都から山形に戻ったが、京都や同志社に空気のようにな、普通にあつたものが、山形には殆ど何もなかった。

青々とした田園と峻厳な山並みが聳える風光の中で、純朴で現状肯定的な人々が、ひっそりと生活していた。

一九七一年(昭和四十六)年から六年間、私が二十六歳から三十一歳の時、東北初のプロオーケストラ「山形交響楽団」(以下山響と呼ぶ)の設立運動を展開し、チェロ奏者兼事務局長であった。運動を始めてから三年目で楽団を給料制にし山形市に定住させ、四年目で、社団法人山形交響楽協会を設立。地方で八番目のプロオーケストラを確立した。

一九七〇年代は高度経済成長の途上であり、「地方の時代」到来と叫ばれていたが、山形には新幹線も通らず、中央の出来合い文化の吸収に努めていた。内外の一流演奏家による演奏会もあるにはあったが、「旅人」として帰ってしまえば元の木阿弥同然。一向に優れた人材も輩出せず、人材は中央へ流出するばかり

り。一体いつになれば、この地に根ざし、未来を耕す一流の文化を定着させることが出来るのか。いつまで後進県に甘んじているのか。十年、二十年、半世紀後の山形の設計をどう考えるのか……。何よりも未来を荷う子供達に、何を与え遺すのか。

大都市にしか音楽はないという「常識」を破るためには、自らの頭で考え、実行しなければならぬ。受容的立場から、オリジナルティの発信者への転換を図ろう。ひな型も経験もなく、不可能と思われた可能性を求め、無謀を省みず「巨大な困難」の壁を、信念と情熱と根気で、一つずつ切り崩したのが山響設立の道程である。プロオーケストラ設立によって生じる効果は、一つの大学設立にも匹敵するものがある。

山響の設立運動は、ふるさとに新しい文化を築き、子供達や県民に本物の音楽を与え、東北人のオリジナルティとプライドと良心を表明する、命がけの住民運動であった。

二、源泉・同志社でのこと

● チェロとカザルスと「鳥の歌」

私がチェロと出会ったのは、同志社大学の学生になった十九歳の時である。チェロを習い始めて約一年後、私は「アームスト館」で寮生活を送っていた。ホールにはステレオがあり、毎日クラシックのレコードを聞いていたが、たまたまパブロ・カザルスの演奏に出会い、感動のあまり動けなくなった。このレコードは、三十年後の現在も心の糧として聴いているが、カザ

ルスがホワイトハウスで、ケネディ大統領の御前演奏をした際のライブ録音である。この最後に、アンコールとして弾いたのが「鳥の歌」であった。

悠然としたテンポの中で、かすれたようであって慈味深く、あたたかく朗々とひびくチェロの音。カザルスが抱いている人間と自然への限らない愛、正義への強い意志、平和への祈り、そして、亡命せざるを得なかった古里カタロニアに寄せる深い望郷の念。純粹と謙虚と正義と崇高と、何よりも限らない愛。

「鳥の歌」に内在している力が、私の魂を洗い揺さぶった。

私はこの演奏を聴くたびに、自分でも弾くたびに、心が熱くなり涙が止まらなくなる。世の中の無常の底から、哀しみを乗り越えて、愛の波動がひびいてくるからだ。後日、山響の設立運動の日々を送り、苦境の中でため息ばかり吐いていた時、心の中でこの「鳥の歌」が鳴りひびき、私をふるい立たせてくれた。

今世紀最大の巨匠、チェロの神様といわれたパブロ・カザルスは、私が山響設立運動をしている最中の、一九七三（昭和四十八）年九十六歳で死去した。その二年前、九十四歳で国連に招かれ、国連会議場で「国連賛歌」を指揮したあと、アンコールに応えてチェロを取り出し、潤んだ声でスピーチをした。

「生まれ故郷の民謡を弾かせて貰います。『鳥の歌』という曲です。カタロニアの小鳥たちは、青い空に飛びあがると、ピース、ピースといって鳴くんです……」

● 新島スピリットとアーモスト館での生活

三年間に及ぶアーモスト館での寮生活は、私を根底から変え、別人にした。

(1) 自分と他人を見つめ、心からの人間関係を築き、一方ではこだわりを持たないこと。

(2) 学生であっても人格と識見を高く持ち、使命に目ざめ、社会に背を向けぬこと。

(3) 人間の活動を支えるのに、最も重要な姿勢は、愛とスピリットであること。

これらのテーマを、日常生活の中で実践する訓練を受け、勝れた寮生から多大な影響を受けた。そのバックボーンとして、太陽のように、空気のように、新島先生がおられた。私達の意識を越え、私達は新島先生の懐に抱かれ、照らされていたのである。

また、アーモスト館では「主人性」と「国際友愛精神」の実践が叫ばれていたが、当時の私のチェロと音楽では、未熟過ぎてこれらを手腕に運用することなど、とても出来なかった。私にとっては、矛盾を抱えたがゆい生活であった。

数年後山形に帰り、山響設立運動を展開し、苦境に立たされた時、今こそ新島スピリットやアーモスト館で学んだ精神を、新島襄の弟子として実践しよう、心に誓った。

新島先生は、私の心に囁かれた。

「選択の岐路に立たされたら、苦しい方を選びなさい」

「私というエゴを捨て、献身しなさい」

「他人のせいにはせず、自己を見つめて一隅を照らし続けなさい」

「謙虚になって、権力に近づかず、決して権力者のように振舞ってはならない」

次の手紙の一節も心に刻まれていた。

「若者よ、一度戦って、そこで止めてはならぬ。三度戦ったあとでさえ、止めてはならぬ。刀折れ、矢つきても、戦いを止めてはならぬ。真理のためにはすべての骨がくだけ、最後の血の一滴まで流してはじめて止めるのだ。真理のために戦うのでなければ、われわれの命は無用ではないか」

私は未熟であったが、自らを信じて、これらの見えない財宝を形に現わすために、喜び勇んで東北の原野に立ち向かった。ドン・キホーテよろしく、愚直にまっしぐらに……。

三、山形交響楽団設立のプロセス

「山響」の設立運動は、最初から苦労の連続であった。プロオーケストラ設立と運営のノウハウなど、どこにもなかったし、悲しいことに、「協力して頂けるだろう」と予想していた地元の人々から、ソップを向かれたことである。音楽家がない、資金がない、聴衆を育てねばならない、活動家がない、事務所がない……と無い無い尽しであった。

受け身で時節を待ったら永久に訪れない「機会」を自分達で作ることにした。山響の設立に賛同する音楽家を、県外や東京

に求め、準備オーケストラとして移入することにした。鑑賞者は、当初小・中・高など学校に絞り、教育界の賛同を得ることにした。

一九七二（昭和四十六）年山響設立の準備オーケストラの活動を開始。県下の高校で十四回の巡回演奏を実施し、多感な世代の心を揺さぶり、教育の現場に旋風を巻き起こした。

スクールコンサートは、チケットを売らなくとも、収入が安定し、予算化が図り易かった。県内外の学校演奏と若干の一般演奏会を中心に、山響五カ年計画を立てた。計画の通りに進めれば、五年でプロオーケストラが設立できるというプランニングである。

この年、私は山響設立運動に専念するため、レコード会社の職を捨てた。丁度その頃、「のぶ子」との出会いがあり、結婚した。生活費は、妻のぶ子が教師やピアノリストとして捻出したものを当てた。これで山形在住の団員が二人になり、二人で無給の事務局を構成した。文字通り、わが家が事務局で、県内外の関係機関や学校に、粘り強く山響設立の趣旨を説明し、演奏会の開催を依頼した。楽団員（全員演奏会毎のエキストラ扱い）確保のため、深夜まで東京方面に電話をかけ、翌日は早朝から返事の電話が鳴った。

翌一九七二（昭和四十七）年、演奏回数も八十回を数え、九月に山形市と酒田市で第一回の定期演奏会を持ち、ようやく山響設立を理解し、山積する幾多の問題点を解決しようとする支援者が増え始めた。そして、山響の運営母体として、任意団体ではあったが「山形交響楽協会」が設立された。社会的認知に

向かっての確実な第一歩が開けてきた。

● 山響の特殊性と七人の侍

翌一九七三（昭和四十八）年、山響はニュースとして広報され、県民の知るところとなったが、山形在住は私達二人のみ。持ちこたえる限界に達していた。設立呼びかけ人の一人であった指揮者の村川千秋さんが、五名のプロ音楽家を連れて、山形に定住することになった。全員無給であったが、子供達を教えたり、七人でアンサンブルを組み、演奏しながら山響をキャンペーンした。七人の核ができた。

この年、山形市から念願の補助金五十万円が出た。この助成は、私達にとりその信頼性と、派生する影響によって、五百万円にも匹敵した。この後、県と国に補助金を申請するステップができたからである。

● 楽団の給料制と協会の社団法人化

運動を始めてから三年、楽団員の山形定住が求められていた。収入の殆どが、東京からの旅費と宿泊費、そしてギャラで消えていた。前年からの運動が効を奏し、一九七四（昭和四十九）年に、山形県と国から新たに三百万円ずつ六百万円の補助金が得られた。

演奏回数も定期二回、ポップス三回、巡回公演四回、音楽教室一一七回で、延べ十万人の人々に、生の演奏を届けていた。地方のオーケストラでは、最多の演奏回数であった。

この実績が、東北各県でも支持を得て、この年の十一月、念



昭和49年頃山響へき地巡回コンサート休けい中に子供達と遊ぶ

願の法人化が認可され、「社団法人山形交響楽協会」が誕生した。私はチェロ奏者を兼務しながら、事務局長として四名の事務局長を抱えることになった。楽団員二十名を給料化し、山形に定住させることが出来た。しかし、山響は依然として経済的な苦境に立たされていた。

● 山響の背骨となった^{へきち}辺地巡回コンサート

山形県内の学校五百校の内、約四分の一が山奥の辺地校か小規模校である。これが東北の現実で、特別な配慮がない限り、一生オーケストラなど鑑賞できない。

このような現状を打開するために、一九七三〜七五年の三年に渡り、民音と県内各教育委員会のバックアップにより、『山響ミニオーケストラ巡回コンサート』が実施された。この様子は、新聞やテレビ等で全国的に報道されたが、その現場の一端を紹介したい。

第一年次は、楽団が給料制になる前で、宿泊費も思うに任せず、毎日ほの暗い朝の五時、山形市からへき地の学校まで70〜80キロの道程を通った。十一月中旬、晩秋の綾錦のような大自然に、みぞれがぐしよしよに降り注いだ。山間の簡易道路はぬかるみに変じ、はまり込んだ車を押す楽員の黒服に、泥が飛び散った。会場の体育館は山あいのため一層寒く、楽器は冷え指もかじかんだ。

それでも演奏が始まると、生徒は身じろぎもせず聴き入り、音の一つ一つを全身で受けとめていた。もっと良い演奏を！私達にも気迫がこもる。やがてあたたかい静寂が訪れる。生徒

と楽団の心が一つに溶け合ったのだ。

第二年次と三年次は、小中学校が夏休み中の炎天下で実施され、特に第二年次は、台風の災害に遭遇した。

前夜からの暴風と集中豪雨で、山の上にあった宿泊先の新庄青年センターだけが無事で、下方の民家はすべて二階まで浸水し、道は濁流に飲まれていた。私達は昨晚避難しておいた楽器運搬車まで、楽器を担いで濁流を渡った。ずぶ濡れの演奏旅行になった。

その日も三十度を越す真夏日だった。湿度が加わり、体育館はまさにサウナのようにあつたが、生徒達は全員待つていてくれた。演奏が始まると、汗がズボンにボタボタ落ちた。ランニングシャツの子供達は、汗もぬぐわずじいっと、「白鳥の湖」や「チゴイネルワイゼン」の演奏に聴き入る。

開け放った窓からは、太陽と蟬の声が注がれてくる。オーケストラと蟬時雨が絶妙に調和した。子供達が演奏に合わせて、全身で歌ったかん高い合唱が、山々にこえました。

● 群響の丸山勝広さんとの出会いと、 「地方交響楽団連盟」合同演奏会

映画『ここに泉あり』で有名な、群響の丸山勝広さんとの偶然の出会いにより、山形と山響に奇跡がもたらされた。

一九七五年五月、地方交響楽団連盟に加入するため、私は文化庁教育会館での総会に向向いた。総会が始まる一時間程前、ロビーの隣りに座っておられた紳士が話しかけてきた。その方がこそ丸山勝広さんその人であった。

私は、慈父のような丸山さんに山響の窮状を訴えた。丸山さんは身を乗り出し仰った。

「山響は、三十年前群響が血みどろになって解決しようとした状況より、はるかにひどい。これは他人ごとではない、放っておけない。私でできることをやってみよう……」

そして、山響を救う手だてを考え、一時間後の総会に、動議として提案することになった。地元をどうやって山響に目を向けさせるか。文化運動を日の当る場所に持ち上げる、支援体制を強めるにはどうすればよいか。その上、地元を啓発するには、外から揺さぶらなくてはならない。動議は次の通り。

一、次期総会を東京ではなく山形で開催。

二、各楽団から三、四名の団員を山形（山響）に派遣し、友情による連盟の合同演奏会を開催する。

三、各団の文化庁助成金を削り、その分を山響にまわす。

動議は万場一致で可決された。私は神のはからいではないかとさえ思い、心で泣いた。

十月になって、朝日新聞が「全国のオーケストラが、山響の苦境を救い、励ます友情公演」と報道してから、マスコミ各社が取材のため山形を訪れた。市民の中から、「地元がこそって迎えないければ」という機運が高まった。そして、山形市長を委員長とする百人の実行委員会が組織され、山響にメスが入り、苦境と財政難などの病巣が、市民の前に明らかにされた。

オーケストラは、ようやくみんなのものとなった。あれから二十年、灯は燃え続けている。

同志社での教育の試み



田島 繁
中学校教諭

今春同経会が開設した「寄付講座」の中で、故松井七郎大学名譽教授の次男・松井純静岡新聞兼静岡放送社長が五月三〇日「若者の活字離れが進んでおり、若者が新聞を読む癖をつけるにはどうしたらよいか教えてほしい」と言われた。その時私は「今まで新聞なんてテレビ欄かスポーツ欄しか見なかったのが、今では新聞の一面しかも経済欄から読むようになった」という私の生徒の感想文を思い出しニヤツと笑った。同志社だからこ

出来る私の教育実践の小冊子『生徒の感動に支えられて』経済の学習内容と生徒の感想文』を昨年作成したので紹介したい。私は一九六八年に入社し、その翌年に「歴史」を教えたが、

その年以外ずっと「経済」だけを教える幸運に恵まれた。それだけに経済に対する生徒の関心を高めるため様々な試みを実践してきた。一九六八―七二年は、八幡・富士の合併など新聞記

事を読ませスクラップブックを作成させたり、合併に賛成か反対かなど討論会を実施した。その時声を震わせながら発言した女子生徒の子供を今教えている。

七三年の石油危機後、物不足による物価高騰や福祉の問題、空港騒音問題などが新聞紙上を賑わせた。私は生徒たちにこれらの問題を自由研究としてグループで実地調査をさせ、三学期に授業の中で発表させた。訪問・調査の引率は毎年八〜十数ヶ所に及んだ。大阪空港の騒音や住民の声をテープで流しながら生き生きと発表していた生徒たちの顔を思い出しつつ、あの頃が一番熱があり、同中の自由研究のレベルは高かったなあ」と我ながら感心している。

成績表が七〇年頃から分析評価となったのでほとんどの教科が生徒全員に自由研究を課していたが、生徒の負担が重くなっ



1995年度卒業 田中愛子さんの新聞記事ノートの一部

たので、十数年前から生徒が教科を選べる選択制となった。そこで私はほとんどの教科が行っている授業ノート提出時に授業に関連した新聞記事とその要約・感想を書いた新聞記事ノートを同時に提出させている。九五年度卒業生は「経済を習う前までは新聞はテレビ欄、テレビはドラマとバラエティとマンガしか見なかった私が、新聞の経済欄を読んで、ニュースステーションを見ている。すごい成長したなあと思う」「自分が社会に向けて大きく一歩を踏み出したような気分。それが今の心境。経済は将来役に立つ。何年後かにこの経済で学んできた一年間で得たもの、それは私の宝物です」とうれしい感想。このような生徒の感想文に励まされながら、毎年九月と二月、三二〇名の新聞記事ノートを読んでいます。

「税についての作文コンクール」では毎年多くの同中生が優秀な賞を受賞しているが、昨年鈴木理紗さんが全国で一位、第一回大蔵大臣賞を受賞した。(同女高の中野麻由子さんも昨年全国一位の国税庁長官賞を受賞) 同中の父母には入学時に寄付を戴いているので、税金でその一部を取り戻せるよう生徒に確定申告の仕方を教えている。毎年テストで国税還付金の計算問題を電卓持込可で出題している。「確定申告を母がしているのを見て、面倒くさそうだなあと思っていたが、私でも出来るように詳しく教えてもらえて楽しかった。京都新聞社主催の税の座談会に出席した時、『学校でどんな税金の勉強をしているの?』と聞かれ、『確定申告の仕方とか?』というと、『上京税務署長を含め、みなさんとても驚かれました。姉に話すと』『私もそん

なこと知らない。教えて！」と言われました。そんなに内容の濃い学習ができて良かったと思います」と。確定申告書の作成や上京税務署訪問など、同中の租税教育のレベルの高さが評価され、昨年「租税教育モデル校」に指定され、また全国納税貯蓄組合連合会長から表彰された。

二十年程前に、久保校長から「田島くん株持っている？経済を教えるなら株を買わない」と言われたことがある。

三年前から経済の動きに敏感になってもらおうと「マネーゲーム」を授業に導入した。一千万円をもとで株を買い、売ると決めた翌日の新聞の株価で売却する。二〜三週間売買し、その結果を感想文をつけて報告させた。「父親に女相場師と呼ばれた。F株とI株がうなぎ登りに上がって行くのを発見。私は相場師に本気でなった。F株を二千株。以前から上がっていた株なので五日ぐらいで売ろうと思ったがもう二日待った。やっぱり上がった。儲けは少なかったが少しこつをつかんだ感じがした。楽しかった」「三十日間延べ一五六回株を売却し八〇五万円得をした。有価証券取引税が一・二万円で、税引後の利益は六八三万円だった。米国では中学、高校でマネーゲームをかなり本格的に取り組んでいると聞いた。日本の中学校でやっているのは少ないのでは？米国ではマネーゲームを開始した日のデータを証券会社が協力してコンピュータ上に入力し、コンピュータでシミュレーションし結果をだしている。これと同じような事が日本でもできないだろうかとゲームをしながら考えていた」と。日本でもインターネットが急速に発展している現在、米国のように株の売買を仮想体験できないかと証券会社に問い

合わせてみた。「今春ホームページ上にバーチャル株式投資クラブを開設したので可能であり、大学・高校でも利用されている」と。六月に発表された日本版ビッグバンの実施計画により、日本の貯蓄形態も預貯金中心から米国のように株や債券に重心を移してゆくであろうと思う。またパソコンはこれから絶対必要であるが、三年生に聞いてみると使っている生徒は少ない。そこで今年はパソコンにも強くなってもらおうと、夏休み前の授業で、株式会社の単元で、パソコン上での株の売買の仮想体験を勧めてみた。早速パソコンを使っている生徒が質問にきたので、操作方法をプリントし、関心ある生徒に配布した。夏休み後に、「マネーゲーム」に対し、生徒がどんな感想を寄せるのか楽しみである。アメリカの中学校では五人一組で一台のパソコンをもち、授業中相談しながらパソコン上で株を買っている。全米規模の大会があり、優勝チームはN.Y.の証券取引所に招待されると新聞にのっていた。昨年八月私が同所を訪れた時は五六〇〇ドル台だったのに、この一年で五〇パーセントも上昇したのは全米中の学生をも巻き込んだ株への熱気が影響しているのではと思った。バーチャル株式投資を通して生徒達がパソコンに慣れ親しみ、また「先を読む」ため、日本や世界の「今」の政治・経済・社会により強い関心をもってもらえればと思う。同志社ならではの新たな教育実践を今年はこの分野で一歩踏み出してみようと思う。